

力士の前を兵隊たちが平気で横切ることです。大相撲が神事から始まった伝統、礼儀を重んじる「国技」であることなど、彼らにはわからない。単なるスポーツの一つだと思っただけです。呼び出しが何度も注意しましたが、言葉が通じないので埒があきません。

それでも、場所も後半になってくると、彼らもようやくわかってくれたようで、横切る者はいなくなりました。その頃には、「寄り切り」も理解してもらえたようでした。力士と親しくなると、部屋に遊びに来た兵隊もいたと思います。

場所の数が少なかったぶん、当時はたくさん地方巡業をしましたが、巡業先でもやはり進駐軍の兵隊が大勢見物にやって来んです。腕ずもうをしようと言われて、相手をしてやったこともありました。

昭和二十三、二十四年の二年間は、明治座近くの浜町公園にやはり仮設の小屋を建てて場所を開き、二十五年から蔵前の国技館に移りました。その間、客席の兵隊の数は徐々に減っていき、ふと気が付くと、彼らの姿はほとんど見えなくなっていました。

それからだいぶ経って、大関が横綱にな

った頃だったと思いますが、横田基地の司令官が相撲ファンで、よく部屋に稽古を見に来るようになったんです。そしてある日、司令官に招待されて米軍のジェット機に乗せてもらうことになりました。

ほうまでぐるっと回ってしまい、それはもうびっくりりましたが、自分たちを打ち負かした国の飛行機に乗って祖国の上空を飛ぶのは、なんだか複雑な気分でした。眼下に広がる日本の国土を眺めながら、私は少しやるせない気持ちになりました。

進駐軍と「ケリー旋風」

なかじま みねお
中嶋嶺雄

東京外国語大学学長



私の八月十五日は、松本市立源池国民学校（現在の源池小学校）三年生のときであった。この学校は市の南東の薄川うすがわの畔にあつて、橋の向う側には筑摩神社がある。前方と後方に近く遠く望まれる美ヶ原と北アルプスの山容や、揚げひばり囀る頃の土手の若草の香りが懐かしい。

町中に育った私が終戦を迎えた場所は、夏休み中の疎開先だった安曇野の村落（梓川村真々部）であつたが、当時の私は、正午の玉音放送を聴いて、思わず泣き出しました。戦時中に見たあるドイツの戦争映画のなかの敗者への残酷な仕打ちの一齣を子供心に想い起こし、日本もそうなるのかと思つて怖さと悲しさのあまり泣いたの

であつた。

そのような敗戦社会の現実には、幸いにしてわが国には訪れなかつたし、戦災を免れた松本での私の戦争体験に語るべき事柄は少ないけれど、終戦を迎え夏休みを終えて登校してしばらくすると、先日まで使っていた教科書の幾ページかを、担任の先生の指示に従つて墨汁で黒々と塗りつぶしたときの光景は、一種の屈辱感のような思いとともに、いまでも鮮明である。修身や国語や歴史に関する教科書のあちこちを先生のいうとおりに真っ黒に塗っていった。それまで教科書（読本）に満載されていた「銃後の守り」とか「水兵の母」といったお話とはもとより、マッカーサー司令部の強い意向

最新刊 靖国公式参拝 の総括

板垣正 (前参議院議員)

(財)日本遺族会顧問

当事者として靖国神社公式参拝問題の真相を知る著者が、いま薦げその全てを白日のもとに、推薦奥野誠亮(衆議院議員)小堀柱一郎(明星大学教授)四六上製◎368頁◎2,000円(〒340)

大東亜戦争 その後

昭和の戦争
記念館第4巻

名越二荒之助 編 (本刊行会編集長)

波はアジア太平洋からアフリカへ。大東亜戦争の世界遺産を海外各国から発掘し、封印された秘話を発信する写真集(全5巻シリーズ)第2回配本。B5並製◎216頁◎2,800円(〒340)

物語 仁徳天皇 [下]

田中繁男 (作家)

仁徳天皇1600年式年祭記念出版。民安かれ国安かれとご祈念された仁徳天皇のご生涯を顧み、古代天皇に思いを馳せる。四六並製◎288頁◎1,500円(〒340)

増刷出来

「南京虐殺」 の徹底検証

東中野修道 (亜細亜大学教授)

虐殺肯定派が未だ反駁できない本書を読まずして「南京」を語るなかれ。堂々の第4刷。四六並製◎424頁◎1,800円(〒340)

平成の大みうた を仰ぐ

第2刷

(財)国民文化研究会編

今上陛下御即位10年奉祝記念出版。平成に入ってから御製・御歌を年毎に掲げ御心を仰ぐ。四六上製◎256頁◎1,800円(〒340)

展転社 [価格は税別]

〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36-301

電話03-3815-0721(代) Fax03-3815-0786

で戦争や国家に関する事柄がすべて否定されるのであるから、ページの大部分を塗ってしまつて用を成さないものもあつた。教室の真ん中には筆を洗うバケツが置かれていたが、水が墨で真っ黒になつたことはいうまでもない。こんなきさいなこととはいへ、この墨塗り体験は、子供心に大変強い印象を与えた事件として焼きついている。

私は一九三六年、つまり昭和二ヶタ生れであり、この前後の数年間の世代が軍国主義教育から民主教育への急旋回を目の当たりに体験したいわゆる墨塗り世代であるが、私の終戦が小学三年生なので、児童の記憶力からすれば、厳密には一九三四〜三七年あたり、つまり昭和九〜十二年生まれの世代を指すのであろう。この年代生まれが故、小淵首相といひ現・森首相といひ、政治

の第一線に数多く立っているけれど、大学の学長にもこの年代が多い。因みに私を含め現在の国立大学協会の正副会長は共に昭和十一(一九三六)年生まれである。この世代は新制の中学校に進むと、文部省著作教科書「民主主義」(上・下)によって、戦後民主主義の洗礼を全面的に受け、まさに新憲法

の精神を徹底的に教えられて育つたので、新憲法を緑の色彩で感知するような独特の憲法感覚を共有しているのかもしれない。

いずれにせよ信州は、松代の大本营や東京からの大量の学童疎開の受入れ地ではあつても、戦争の直接の犠牲にはさらされなかつたが、そんな信州にも当然、進駐軍はやつてきた。松本には終戦の年の十月初めに二百人ほどの進駐軍が来て、市の中心を流れる女鳥羽川沿ひの繁華街・繩手通りに

繰り出してはガムやチョコレートを群がる子供や子供に混じつて腰を低くして手を出している大人にジープの上からばらまいていた。私の家はすぐ近くの中町という商店街だったので、こんな場面をよく目撃し、卑屈な光景だと内心反発していた。

松本には歩兵第五十連隊があつたので、その武装解除も進駐軍の仕事であつたろうし、郊外の笹部にはちょうど完成とともに終戦となつた松本飛行場があつたので、そこが進駐軍に接収されたことなども、臍氣に憶えている。

翌昭和二十一年の夏、たしか「東京裁判」が始まつた頃だと思つて、長野県の教育を指導監督する進駐軍のウィリアム・ケリーという軍政部教育官が私たちの源池小学校へ来校したことがあつた。ジープで煽

爽と校庭を横切り、どこか校内に入ってきたケリー一行は、県内の各校巡視の一環として私たちの小学校を選んだのであろう。視察を終えた後、二階の音楽室でだったと思うが、ケリー教育官を迎えてクラスから選ばれた上級生徒とのミーティングが開かれた。青い目が引き締まって鼻が上に反っていた映画俳優のようなまだ若いアメリカ人だったという記憶があるけれど、生徒も何か発言するようにとの先生の指示だったのであろう、私がアメリカの教育制度について質問すると、ケリー氏は通訳を介して懇切に答えてくれた。しかし、教壇の机にどかどか腰かけて生徒机の上に編み上げ靴を無造作に投げ出している彼の姿を見たとき、ああやっぱり日本はアメリカに負けたのだな、と私はつくづく思ったものである。

このケリー教育官こそ、信州の教育界にいわゆる「ケリー旋風」を巻き起こして、軍国主義教育の一掃から一転して全国に広がるレッド・パージに火をつけた占領期進駐軍の象徴的な人物であった。ケリー氏は、当時まだテネシー大学に在学中の大学生で、アメリカ版の学徒動員兵であったことを、私は後になって知った。

マッカーサーの偏見

木村治美

エッセイスト



昭和ヒトケタとくくられるが、五年生まれと七年生まれとでは、終戦のとき受けた影響の質と大きさが、非常にちがうと事あるごとにずっと感じてきた。ひとことい

兵場から出征したと男が話せば、それを受けた女が、「あら、私は日の丸をふって見送った中にいたんです」

えば、戦争にコミットしていたか、いなかっただかのちがいである。昭和七年生まれの私は、終戦のとき、中学一年であつたから、もちろん情況はわかつていた。しかし子どもとして守られ、戦争にたいしてはまったくの受け身であつた。戦争が語られるとき、取り残される思いと、だからこそ、なんの負い目もなく、戦後の開放の気分に乗ってこられたという思いがある。

やあやあ、という感じの場面に居合せたこともある。昭和五年生まれはそこまでにはならないが、「戦争が終わったとき、虚脱状態になり、これからどうやって生きていこうかと思つた」

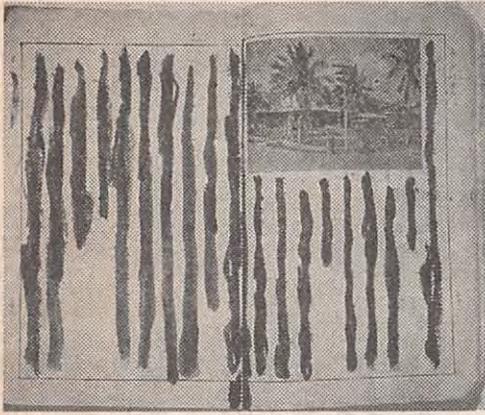
都内の高等女学校に入ったとき、二年生以上は勤労動員され、重需工場に働きにいらした。「私たちは水路部にいる」と近くの上級生がほこらしげにいらしていたが、あれはなんだったのだろう。

わすか二年の差でも、七年生まれには、そういう思いはまったくなかったと思う。ただししかし、終戦を境に人びとの価値観が百八十度変わったことに気づくほどには、成長していた。鬼畜米英を口にし、マッカーサーをマックラアサーと揶揄していた

威勢のよい歴史の先生が、手の平を返したように日本の軍国主義を批判するようになった。さすがに私たちはヒソヒソと吹きあ

ったが、その先生はいつのまにかいなくなった。転任校では、初めから反戦論者であった顔をしているにちがいないと思うほどには、ものはわかっていた。

GHQの命令で、教科書の墨塗りもやられた。国語の教科書など、指示されるままに不都合とされる文言を塗りつぶすのだが、その箇所はあまりに多くて、教師も生徒もしまいにはもうどうでもいいやという気持ちになった。実際、そのような墨塗りの教科書が使われたことはなかったが、とも



墨塗りされた教科書

かく過去は否定された。

きよんとする思いで従順に作業をしたが、なにごとにも眉を唾をつけてきき、一歩引いて考える姿勢は、まちがいはなくこの時代に培われた。デカルトではないが、「なに〜とも疑え」の精神である。

進駐軍が町を闊歩するようになったのはまもなくである。私が住んでいた江古田駅の周辺にも、池袋の盛り場から流れてきたらしいG Iとパンパンとが抱きあっていた。パンパンとは「原語不詳」第二次大戦後の日本で、街娼・売春婦のことを指した語」と広辞苑にはでている。これらのカッブルがなにかあやしげな目的のために一緒にいることは想像がついたが、その面でも私は幼かった。

私は、夕方、会社から帰る父を毎日のように駅に迎えにいき、柵にもたれてこれらの男女を観察していた。

「おまえはなんでお父さんを迎えにくるのか」と父にきかれた。私にしてみれば退屈なあまりの散歩であった。ろくな娯楽もない時代だ。しかし父が母に、

「教育上よくないから、迎えにこきすな」といつているのをきいた。

私にとって大きなショックだったのは、ある日、父がひろげた新聞に、「日本人は十二歳」というマッカーサー発言の大見出しを見たときだった。

「え、お父さんもお母さんも、私とかわらない子どもなのか」

と、ふしぎな気持ちで親の顔を眺めたのをおぼえている。

最近になって、当時のアメリカの公文書を調べられた西鏡夫氏の『富国弱民ニッポ』を読んで、一連の事情がよくわかった。この発言は占領直後の一九四五年十月のもので、日本人についてのかれの見解は、その後六年間の統治の期間中、変わるものがなかった。解任され帰国してから、ある公聴会で、マッカーサーは同じ報告をしている。我々アングロサクソンが四十五歳なら、日本人は十二歳の子ども、いかようにでもコントロールがきく、と。

私はマッカーサーが日本についてのこの偏見を、いったいどこから仕入れたのか、最近そのルーツを探してみた。かれは占領以前も以後も、ほとんど日本人とは接触しなかったといわれるのだから。

一八八八年、パーシヴァル・ロウエルは十

年に及ぶ日本滞在の末に、『極東の魂』という進化論に基づいた日本人論を著した。そこで、十二歳とは書いていないが、それに類した評価を下していた。日本という国は、未成熟なまま進化を完了したふしぎなケースである、と。

ロウエルはのちに天文学者として火星には人工的運河があり知的生命体がいるといつて、世界に衝撃を与えた人物である。この本も「本の中の本」として激賞され、ラフカ

ディオ・ハーンの来日のきつかけとなった。

六十年近く前の本がマッカーサーの日本人観のもとになっていふことを、実証的に紹介するスペースはもうない。それにしても異文化を自分の価値観で見ることが、いかにナンセンスか。しかし、さらに五十年たつて、マッカーサー発言がいまだに日本人をマインドコントロールして生き続けているのは、私がいまごろになってあらたに実感するところである。

ページされてよかった

たなか まさあき
田中正明 評論家



私は昭和十七年歳末、三十二歳で赤紙召集を受け、甲府の歩兵第四十九連隊に入隊した。だが、三日後には中支那野戦兵器廠に転属、初年兵教育を上海で受けた。

中支那兵器廠の支廠は南京、漢口、武昌、無錫にある。終戦を私は陸軍兵技伍長・暗号手として無錫で迎えた。

野口部隊長以下約百名の将兵は全員集會場に整列して、玉音放送を拝聴した。しかし雑音が多くて殆んど聴き取り難かった。

だが、耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……の玉音はハッキリ聴取できた。「戦争は負けたのだ。負けいくさではあるが、戦争は終結する」というお言葉であることだけは、ハッキリ分かった。

どこからともなく、すすり泣き、むせび泣く声が起り、それが津波のようにひろがり、集会場はたちまち愁嘆場となった。なかには声をあげ抱き合つて泣き崩れる兵もいた。

その夜、私は自決を覚悟し、死処を求めて、軍刀片手に營庭に出た。その時、「田中伍長！ 早まるではないぞ！」と野口大尉に呼び止められて説諭された。

翌日からは機密書類や日章旗まで焼却した。兵たちは家郷からの慰問袋や手紙類まで焼いた。狭い兵舎と兵舎の通路に、夜陰まで燃える焰と悲煙は今でも忘れ難い悲しい思い出である。

三日ほどして湯將軍麾下の国民党軍がやってきて、兵器・弾薬等の引渡し作業がはじまった。

無錫には恵山という小高い美しい山がある。山麓には大きな寺院があり、山頂には展望台がある。ここに竹つと、眼下に紺碧の太湖が横たわり、多数の帆船が港湾のあたりを群れ動いている。絶妙な風景である。思わず口ずさんだ拙歌……

涙さへ今は流れず蟬しぐれ 今日も聞
きほけ 雲見つめをり

あの雲の下あたりが日本か？ なつかしい故国よ！ と望郷の思いに、胸が痛むのを覚えた。